石川県・私立鵬学園高校

基礎学力向上

組織的な授業改善とICTの効果的な活用で、学びに向かう生徒を育成

変革のステップ

背景と課題

- 部活動の特色化により入学者数が増加する一方、学力に課題がある生徒も見られるようになったため、生徒の学力向上を目指し、指導体制を整備

実践内容

- **振り返り学習**　国語・数学・英語で義務教育段階の学習内容の学び直しを行う
- **45分授業**　授業時間を従来の50分間から45分間に変更。その対応策は各教師が考えるようにすることで、授業改善への意識づけを図る
- **ICTの活用**　ICTを活用して授業の効率化を図り、生徒が協働学習を行う時間的余裕を確保。板書を行わない「ノートレス授業」も実現
- **小論文指導**　3年間の段階的なカリキュラムを作成し、全校体制で取り組む

成果と展望

- 生徒に基礎学力が定着し、模試などの成績が向上
- 2017年度からは、生徒の「考える力」「書く力」「話す力」の向上を指導改革の軸に据え、さらなる授業改善を推進していく

客観的な学力指標を基に、教師間の意識共有を図る

石川県の能登半島東部に位置する鵬学園高校は、普通科を擁する私立高校としては地区唯一の高校だ。生徒の多様な進路希望に応える学校として、地域から信頼を得ている。そうした同校は、少子化に伴う入学者数の減少に歯止めをかけるため、2011年度に部活動の特色化を図り、施設の増設や指導者の増員を行った。その結果、多くの部活動で実績が向上し、それに魅力を感じて入学してくる生徒が増加した。一方、生徒の学力層の多層化が進み、基礎学力に課題がある生徒も見られるようになった。そこで、14年度、生徒の学力向上を目指して指導改

PROFILE

七尾女子高校として開校。1990年に共学校となった。「清廉・積極・全力・感謝」を生活目標とし、何事にも積極的かつ全力で臨む人材育成に力を入れている。女子バスケットボール部やサッカー部が全国大会に出場するなど、部活動も盛ん。

設立	1963（昭和38）年
形態	全日制／普通科・調理科／共学
生徒数	1学年約150人
2017年度進路実績（現役のみ）	国公立大は、都留文科大に1人が合格。私立大は、金沢星稜大、神奈川大、京都産業大、立命館大などに延べ50人が合格。短大、専門学校進学56人。就職31人。
住所	〒926-0022　石川県七尾市天神川原町ハ32
電話	0767-53-2184
Web site	http://www.ohtori.ed.jp

善に着手した。上坂俊就教頭は次のように語る。

「基礎学力は社会で生きる力の根幹であり、生徒の希望進路の実現を大きく左右します。学習指導を改善し、生徒や保護者の信頼に応えたいという思いがありました」

その第一歩として、生徒の学力を定期的に測るため、ベネッセの「基礎力診断テスト」（＊1）を導入し、全学科・学年の成績を職員会議で共有。定着に課題がある分野・単元を洗い出して指導に反映させることにした。さらに、教師間の目線を合わせるために、GTZ（＊2）がDゾーンの生徒は進学・就職ともに厳しいという全国的な傾向があることも、上坂教頭が職員会議で繰り返し説明した。

「指導改善を実りあるものにするためには、学校が一丸とならなければなりません。そこで、生徒にとって学力向上が切実な課題であることを、客観的な指標を用いて先生方に示しました」（上坂教頭）

鵬学園高校教頭
上坂俊就 こうさか・としなり
教職歴15年。同校に赴任して15年目。地歴公民科。「未知なる領域に挑戦し、新たな世界観を生み出し続ける生徒の育成」

鵬学園高校
杉森章子 すぎもり・あきこ
教職歴18年。同校に赴任して18年目。総務課主任。国語科主任。「地域社会の礎となる力を身につけて卒業させる」

鵬学園高校
坂下 文 さかした・ふみ
教職歴14年。同校に赴任して8年目。生徒指導課。調理科。「生徒は自分を映す鏡だと思い、反省と挑戦を繰り返す教師でありたい」

学び直しを徹底し、生徒に基礎・基本を定着させる

15年度には、2つの取り組みを始めて改革を本格化させた。1つは、国語・数学・英語の義務教育段階の学習内容を学び直す「振り返り学習」だ。各教科で指導方針を立て、教材も作成した。例えば、国語では授業中に漢字テストを行い、合格点に満たなかった生徒は放課後に補習を受ける。そこでは教師からの声かけを重視していると、国語科主任の杉森章子先生は話す。

「義務教育段階の漢字の読み書きはあらゆる教科・科目の基礎であることを伝え、『しっかり身につけよう』と呼びかけています。それにより、生徒に根気よく取り組もうとする意欲が生まれると考えています」

もう1つは、45分授業だ。授業時間を従来の50分間から5分間短縮し、生徒が授業に集中しやすくなるようにした。そこには、教師の指導改善への意識を高める意図もあった。

「45分授業にいかに対応するかを先生方がそれぞれ検討することで、自身の授業を見直すきっかけにもなればと考えました。指導の工夫により、授業は多様になります。従来の一斉指導に加え、グループワークなども取り入れるようになれば、生徒の学習意欲の向上にもつながると期待しました」（上坂教頭）

ICTの活用を推進し、生徒の学習意欲を高める

16年度からは、ICTを用いた指導改善に力を入れている。その準備は15年度から始め、上坂教頭らが県内外の先進校を視察し、各校の取り組みを校内で共有してきた。

ICTを重視する目的は、生徒の興味を学習により強く引きつけることと、効果的なアクティブ・ラーニングを実現することにある。例えば、杉森先生が担当する「現代文」の授業では、学習内容への導入として、教科書の文章に関連する動画を各単元の冒頭で示す。また、評論の単元においては、生徒が内容を要約した資料を、プロジェクターで投映して発表し、それに基づいて生徒同士が話し合いを行う。

「45分授業に対応するため、私は授業の組み立て方を見直しました。それが、ICTの活用との相乗効果を生み、授業の充実につながっていると感じます」（杉森先生）

「Classi」（＊3）も、多くの教科・科目で活用している。調理科では、生徒が長期休業中の課題として調理を行うが、そこで作った料理を写真に撮り、Classiにアップロードするように指導した。生徒は互いの料理の写真を見て刺激を受けていると、調理科の坂下文先生は述べる。

「課題に取り組んでいなかった生徒は、早く仕上げた友人の写真を参考にして調理を工夫したようです。また、友人の写真に『上手

＊1 GTZ（学習到達ゾーン）という指標で生徒一人ひとりの基礎学力の定着度と学習力、コミュニケーション特性（自我同一性）を測る、ベネッセの生活・学習指導用テスト。
＊2 学習到達ゾーンのこと。ベネッセのテストにおける共通の学力評価指標。「S1」～「D3」の15段階がある。 ＊3 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社であるClassi株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。

だね』『私も負けないよ』といったコメントを書く生徒も目立ちました。友人からすぐに感想がもらえるので、生徒はうれしかったと思います。さらにうまく作れるように、課題に再挑戦する生徒もいました」

17年度は、授業で教師が調理する様子を動画で撮影し、配信していくことも検討中だ。

「生徒が復習しやすい環境を整え、知識・技能の定着を支援できるように、ICTを活用していきたいと考えています」（坂下先生）

上坂教頭は、担当する「日本史」で「ノートレス授業」を推進している。これは、板書を行わず、プレゼンテーションソフトなどで作成したレジュメ（**図1**）をプロジェクターで投影して進める授業だ。レジュメには、重要な用語や人物、事件といった学習の核となる情報のみを載せ、人物同士の相関や事件の背景などは上坂教頭が口頭で解説。生徒には、必要に応じて解説を教科書に書き込むように伝えている。ノートを持参するかどうかや、レジュメの内容を書き写すかどうかは生徒の自由としている。授業後には、レジュメをPDF化してClassiにアップロードし、生徒がいつでも手軽に読み返せるようにしている（**写真1**）。

上坂教頭は、以前は生徒に伝えたい内容をすべて板書していた。そのためか、多くの生徒はノートを中心に学習し、教科書をあまり読まなかったという。

「生徒が自分で調べ、考える習慣を身につけられるよう、与える一方の授業を改められないかと考えていました。ICTを活用した指導の試みとして、先生方の参考になればという思いもあり、『ノートレス授業』に踏み切りました」（上坂教頭）

これにより、授業に集中してしっかりメモを取り、教科書をよく読む生徒が次第に増えていった。

「生徒は、ただレジュメだけを読み返しても、出来事の因果関係がよく分からないことに気づいたようです。歴史の『なぜ？』に意識が向き、自分から答えを見つけようとする知的好奇心が生まれてきていると感じています」（上坂教頭）

また、板書をやめたことで授業時間に余裕が生まれ、動画などを交えてじっくり解説したり、生徒同士が学びを深める機会を設けたりできるようになった。例えば、戦国時代の単元では、関連するテレビの教養番組を見ながら、生徒が時代背景などについて話し合った。

「定期考査には、生徒が授業で見た動画から気づいたことや興味を持ったことなどを記述する問題を出しています。しっかり書ける

図1　「ノートレス授業」のレジュメ（例）

レジュメ1枚につき、学習の重要なポイントを1～2点に絞って掲載している。また、生徒に歴史の流れをしっかり捉えてほしいと、紙芝居のようにストーリー性を重視して記述・構成している。

＊同校の資料を一部抜粋して掲載

写真1　通学の電車やバスの中、自習室などでは、レジュメのPDFをスマートフォンで参照しながら復習する生徒が多く見られる。スマートフォンは、教師に申請し許可を得れば、校内でも使用できる。

生徒が多く、平均点も向上しました。生徒の学習意欲の高まりを実感します。当初は『板書をしなくて生徒がついてくるだろうか』という不安がありましたが、今では『ノートレス授業』に切り替えてよかったと思っています」（上坂教頭）

教師が互いに授業を見学し、よりよい指導を追究

新しい指導の工夫を学校全体で共有するために、「互見授業」も重視している。これは、同校の伝統的な取り組みで、全教師が互いの授業を年1回以上見学し合い、事後に見学者が感想などを授業者に伝えるというものだ。

「互見授業」は指導改革の進展とともに活発になり、15年度は「45分授業への対応」、16年度は「ICTの活用によるアクティブ・ラーニングの推進」を共通テーマとした。

「意欲的に授業改善に取り組む先生の授業を見学すれば、新たな気づきが得られ、自身の授業改善につながります。授業者も、見学者の感想から、新たな工夫のヒントが得られます」（杉森先生）

段階的なカリキュラムを作成し、学校一丸で小論文指導を実践

生徒の「書く力」の向上を目指し、小論文指導にも力を入れている。

従来は推薦・AO入試対策として3年生に行っていたが、16年度は対象を全学年に広げ、先進校の取り組みを参考にして段階的な指導カリキュラムを作成した。1年生では、文章の型をしっかり身につけられるように、新聞記事を書写・要約し、記事に対する感想を書く。2年生では、「選挙権年齢引き下げ」「小学生の携帯電話所持」といった共通テーマを設けてその是非を述べる。3年生では、課題文を読み、筆者の主張に対する自分の考えを指定字数で論理的に述べる練習を重ねる。添削は学年団の全教師が手分けをして行い、生徒一人ひとりにコメントを書いて返却する。こうした体制に改めた当初は、指導に消極的な教師も見られたが、今では多くの教師が熱心に取り組んでいる。

「定期的に生徒の文章を添削していると、句読点の使い方や主語・述語の呼応などが次第にしっかりしてくることがよく分かります。生徒の書く力の伸びを実感できることで、先生方が小論文指導に前向きになっていったのだと思います」（杉森先生）

生徒一人ひとりに応じた指導で、地域の期待に応えていきたい

一連の指導改善の成果は、生徒の学力に表れている。例えば、国語では漢字や語彙が定着し、しっかり読解できるようになった生徒が増えている。「日本史」の定期考査の成績向上は、前述した通りだ。また、「基礎力診断テスト」においては、GTZがDゾーンの生徒が減少しており、基礎学力の定着がうかがえる。そして、こうした生徒の変化が原動力となり、教師の指導改善も一層進んでいる。

今後は、生徒の「考える力」「書く力」「話す力」のさらなる向上を目標に据え、アクティブ・ラーニングの充実を図っていく。

「社会に出れば、生徒は様々な課題と向き合うことになるため、状況に応じて自分で考えて工夫する習慣を、高校時代に定着させたいという思いがあります」（坂下先生）

例えば、生徒が文章を書く機会を各教科・科目で設け、小論文指導と相補的な取り組みにしていくことや、部活動の活動日誌を小論文指導に活用していくことも検討している。

「部活動の活動日誌の文章は生き生きしており、生徒は大好きなことについて書けば、しっかりした自己表現ができることがよく分かります。授業外にも視野を広げ、指導を工夫していきたいと思っています」（杉森先生）

同校は、地域の少子化が進む中、入学者数を増やしている。地域からの期待に応え続けるためにも、指導改善を継続し、生徒の生きる力を高めていく必要があると、上坂教頭は語る。

「生徒が変われば課題も変わるため、指導には改善を重ねなければなりません。管理職には、全国の学校の先進的な取り組みを視察し、先生方にアイデアを示す使命があります。今後も、生徒一人ひとりに応じた指導を全校体制で進めていきたいと考えています」